

To Forward

～前に向かって～

2024年1月14日

加中人権スローガン

「気づき・考え・行動する」

めざす学校像

「希望と笑顔あふれる楽しい学校」

皆さま、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

さて、新しい年を迎えると、それぞれ誓いを立てたり目標を決めたりして、今年を良い年にしようと思っていることでしょう。若い頃は、「あれもこれもしたい」、「これができるようになりたい」と多くの目標や誓いを立てたように思いますが、年齢を重ねると「今年は家族みんなが平和にすごせますように…」とだけ願うようになりました。「それぞれが健康で、みんな仲良く、平和で元気に暮らす」。たったこれだけのことと皆さんは感じるかもしれませんが、これは究極の贅沢な願いで、家族が増えればこの願いはなかなか叶うことがありません。家族の中の誰かが病気を患ったり、心を痛めたり、仲違いしてしまったり…しかし、「願いが叶わない」と嘆くのではなく、誰かに助けてもらったり、家族で支え合ったりしながら困難な状況を乗り越えていけると前向きに考え、行動することが大切だと思って今年も過ごすつもりです。

現在の日本は一見平和に見えますが、昨年から伝えているように、世界で起こっている戦争や紛争と無関係ではありません。また、人権学習で学んでいるように、みんなが元気に暮らせるような社会情勢でもありません。「平和で元気に暮らす」ということは、その人の生活を脅かすような偏見や差別が存在していれば実現できないものです。そして、「平和で元気に暮らす」とは、心を傷つける人がいないことや困ったときに助けてくれる人がいる社会でなければ実現できないものです。「人権を大切にする」とは、「自分を大切にする」「人を大切にする」が原点です。今年有加茂谷中学校の全員で、もう一度その原点を見つめ直し、すばらしい学校をめざしましょう。

第40回全国中学生人権作文コンテスト 法務大臣政務官賞

「ありがとう」

静岡県浜松市北部中学校3年 小木曾 莉桜

「りおちゃんの言葉は私の薬」

私はこの言葉に大きな衝撃を受けた。

中学一年生の頃、クラスに「一型糖尿病」をもつ女の子がいた。彼女は食後必ず注射を自らの手で打つ。そして、血糖値が高すぎたり低すぎた際にはまた別の注射を打つ。毎日それを繰り返していた。「打たなければ死ぬ」という恐怖、注射の痛み、当事者になってみなければわからないことだが、「辛くて苦しいこと」だというのは私にでもわかる。

入学し、彼女が自分の病気について明かしてから何日かたったある日、

「なんであんな奴、俺らの学校に来たんだよ。」

そう、一人の男子が言ったのだ。その一言をきっかけに彼女は周りから以前とは違う目で見られるようになった。そしていじめと発展した。

「病気をもっているから私たちとは違うという勝手な偏見や差別、このようなことはあってはならない。」私はそう思った。でもそれを言えなかった。怖いから、いじめられるのが……。もし、自分にいじ

めのまがかわったらどうしよう、と自分のことだけを考えていたのだ。結局、私がやっていたのは見えて見ぬふりで、いじめている人たちと何も変わらない。

私たちが彼女を見る目は悲しくなるほど冷たいものだった。私たちのその目や、ひとつひとつの小さな言葉がどれだけ彼女の心に傷をつけたことだろう。それから彼女は学校を休む日が多くなった。

「今日もいねえじゃん、ラッキー。」

「〇〇？誰それ？そんな奴いたっけ。」

まだそんなことを言っているの？とやはり言いたくても言えなかった。

ある日、彼女が過呼吸になっていた。私は、

「大丈夫？」

と声を掛けた。言おうと思って出た言葉ではない。無意識でとっさに出た言葉だった。

「ありがとう」

そう返って来た。「ありがとう」この言葉を聞いて今まで自分がしていたことを心底後悔した。人の心を傷つける言葉があるのなら人の心を癒す言葉もあるだろう。そして私がかけた「大丈夫？」という一言が傷ついた彼女の心を癒したのだと思う。「ありがとう」この一言で、私は「変わろう」と思った。だから私は声を掛け続けていこうと決めた。

私が彼女を手伝っているのを見て、文句や悪口を言う人はたくさんいた。しかしその分、

「私にもできることある？」

と私の味方をしてくれる人たちもいた。怖くて言い出せずにいた人は私以外にも大勢いたのだ。私が少し変わったことで周りにいる人たちも大きく変わった。人は人で変わると改めて思った。

一年生終了と同時に私は引っ越すことになり、皆が私に手紙をくれた。ひとりひとりの手紙を読んでいくと、彼女からの手紙を見つけた。ぎっしりと文字がつまっていて、私へのお礼の文がそこにはつづられていた。そして最後の一文に「りおちゃんの言葉は私の薬でした」とあった。言葉にはそれほどの力があるのだと確信した。

私一人では、彼女へのいじめを止めることはできない。いじめは、いじめる人が変わらなければ終わらないと思う。でも、私一人でも彼女を助けることはできる。それは、一言かけるだけ。たった小さな一言でも、彼女にとってはとても大きいもので彼女の心を支えることができる。

はじめに一人変わることで周りも変わり、その周りも変わる。私はそのはじめの一人になりたい。そして、皆の心の支えとなる存在になりたい。これが私の夢だ。

自分自身を変えることというのはいじめを減らすために私ができる最善のことだと思う。

自分を変えるというのとはとても難しいことだけれど夢を叶えるために私は実行してみせる。

私は彼女に出会えたことにとっても感謝している。私をこれほどに成長させてくれたのは彼女だ。

そんな彼女に私は「ありがとう」の言葉を返したい。

(原文まま)

この年始は、能登半島での大地震や航空機事故など、心が痛むことが多くありました。たくさんの尊い「いのち」が失われてしまったことに、心から哀悼の意を表します。私が運転中に聞いているラジオは年始の「あけましておめでとうございます」という挨拶を控えており、被災した人々への心遣いを感じました。能登半島の被害が大きい地域の学校はまだ授業が再開できるような状況ではなく、昨日聞いたラジオでは「今の避難所には同じ学校の友達がいな。早く学校が始まって、友達に会いたい」というメッセージが読まれていました。私たちに何ができるのか考えて、加茂谷中学校として有意義なことができるといいですね。

私たちの加茂谷中学校も、数年前まで浸水害を被ることが度々ありました。昨年の人権参観授業では1年生が「災害時の人権について」というテーマを学習しました。現在被災地では支援が思うように進まず、避難所での生活は過酷で、その中でお互いに尊重しながら生活しているのだと思います。被災地にみんなで思いを馳せましょう。